住みよいたけし

住みよい武石をつくる会広報
第52号
2025年12月16日発行
事務所　武石地域総合センター内
TEL:0268-85-2511
https://www.s-takeshi.jp
印　刷　中澤印刷株式会社

地域の伝統文化を掘り起こし、武石っ子に残そう！

MYわらぞうりDEたけし散歩

11月９日（日）、住みよい武石をつくる会子育て教育文化部会は武石地域総合センターで、わらぞうり作り講習会「MYわらぞうりDEたけし散歩」を開催しました（協力：はり・きゅう・マッサージ・呼吸法　和とろん）。講師に坂口信茂さん、協力者に金子今朝雄さんと佐々木良子さんを迎えて、子ども６人を含む26人が参加し、初めてのわらぞうり作りに挑戦しました。作業が進むにつれて形が小判形からくずれてきてしまい、「うーん、難しい！」といった声やお互いに見せ合って笑う声が上がりましたが、坂口さんや金子さん、和とろんさんの指導、手直しを受けて、約１時間半程で片足分が完成しました。参加者はもう片足分を作って1足を完成させましたが、初めてのわらの取り扱いに苦労をして、1足完成できなかった人もいたようです。

今回、散歩まではできませんでしたが、最後に自分で作ったわらぞうりを履いてみて、履き心地や足裏の感覚を確かめていました。

お父さんと参加した小学校の子どもさんは、「わらを編むところが楽しかった。またやりたい」と話していました。講師を務めた坂口信茂さんは、「今日、初めてわらぞうり作りに挑戦した人がいますが、皆さん思った以上に上手にできておどろきました。もうちょっと練習すれば上手になると思います。また練習する機会があればいつでもお手伝いします」と話していました。

武石巣栗渓谷 森林浴ウォーキング
健康福祉体育部会

10月18日（土）、つくる会健康福祉体育部会は、武石巣栗渓谷で森林浴ウォーキングを開催しました。武石地域外在住の方など24人の皆さんが参加、つくる会部会員も合わせて約30人が黄色や赤色に色づき始めた渓谷の山はだを見ながら落ち葉を踏みしめつつ遊歩道を歩きました。

武石観光センター下のお仙ヶ淵橋からお仙ヶ峡上広場まで、さらに竜ヶ沢ダムのダム湖を一周して、約４kmのウォーキングでした。

武石に住んでいても、また武石出身者でもなかなか来ることがない渓谷を散策しました。

案内役の児玉卓文さんから、一帯に生えていたコメツガという木を切り出して、上田城や大屋橋の建築に使われたことや、かつて武石峠を通って松本からの物流があり、峠には茶屋があった、などの説明がありました。

巣栗渓谷展望台

竜ヶ沢ダム湖

お仙ヶ峡の堰堤では流れ落ちる水しぶきで虹が現れ、珍しい景色に参加者はスマホのカメラを向けていました。

また、竜ヶ沢ダム湖では白樺林の向こうに湖の水辺を見通す景色に目をやりながら、休憩をしていました。

ウォーキングの終わりがちょうどお昼の時間となるので、武石観光センターでの食事時間に合わせて送迎バスの手配をしたところ、参加者の評判がとても良くて約半数の皆さんが武石のおそばを楽しみました。

食品営業許可取得から1年 おはぎ弁当の販売

10月23日（木）、つくる会産業経済部会は、夏季に休んでいたお弁当の販売を再開しました。今回はおはぎ弁当を販売、準備した60パックは今回も好評で完売となりました。

また、11月27日（木）には栗おこわ弁当の販売を行いました。

JAひだまり武石で食品営業許可を取得して1年が経過し、調理室の営業利用はそば販売やお弁当販売、その他で９回の利用があり、夏季を除き月に約１回のペースなっています。

おはぎ弁当

つくる会ではイベント時やお弁当販売時の調理室として直接利用する以外に、食堂や移動販売などの事業をやってみたい方が定期的に調理室を使ってほしいと考えています。

産業経済部会長の橋詰真由美さんは、「地域の活性化のため、調理室を使ってくれる人が出てくれると嬉しい」と話していました。

利用を希望、または関心のある方はつくる会事務局（0268-85-2511）までご相談ください。

第３回 武石地域防災会議　講演会「命を守るためにできること」

11月16日（日）、発足から第３回目となる武石地域防災会議が武石地域総合センターで開催されました。今回は、東日本大震災当時押し寄せる大津波から園児を守った元名取市閖上（ゆりあげ）保育所所長（現在 市民団体「ゆりあげかもめ」代表）佐竹悦子氏を講師に迎え、「大切な命を守るためにできること」と題して、講演とワークショップを行いました。会場では、自治会役員や地域住民、防災アドバイザーや消防団員、保育士を含む市職員など約60名が話に聴き入りました。

佐竹氏は、外出先で地震に遭い、急いで保育所に戻ると、余震が続く中、園庭に敷かれたブルーシートの上に園児51名と職員10名が既に集合していました。職員には、「逃げます」「車を持ってきてください」「小学校で会いましょう」の3つの言葉を伝えました。職員は園児達を車に乗せると２キロ先の閖上小学校へ、地震発生から34分後に全員無事避難を完了させました。その約30分後に津波が到達しています。

名取市閖上地区は人口の約一割にあたる750名が犠牲になりました。こうした中、園児や職員の犠牲を1人も出さずに避難できたことは、「閖上の奇跡」とも言われていますが、「偶然で奇跡は起きない。皆が考え、努力し、避難マニュアルに基づき、訓練を重ねた結果。何より『命を守る』という基本を共有していたからできたこと」と佐竹氏は説いています。

避難マニュアルと、これに基づく日常的な訓練が実際の災害時にいかに役立つかを教えていただいた講演となりました。

ワークショップでは、参加者が８つのグループに分かれ、災害時に起きる様々な場面を想定して、必要な物や用具を配られた絵カードの中から選び、得点を競うゲームを行いました。災害時、身近にある物をいかに有効に救助等に活用するか、良い訓練となりました。

令和7年度 武石地区住民会議開催
テーマ「共に生きる武石のつながりづくり」

11月22日（土）、武石地区住民会議が武石地域総合センターを会場にして開催されました。武石地区社協が主催して毎年行っているもので、50名ほどの住民、関係者が参加しました。

講師に長野県長寿社会開発センターの下倉亮一氏をお迎えし、「みんながいつまでも元気で暮らし続けるために」をサブテーマに、参加者がチームに分かれて話し合いを持ちながらすすめられました。冒頭、上田市真田在住の高齢女性グループの懇談の映像では、活気に溢れ賑わいのあった地域の暮らしが高齢化や人口減少などにより元気さが薄れてきた現状を心配する姿が紹介される一方、この女性たちが、共通する話題で明るく元気に交流している様子がうかがえ、ささやかながらも潤いのある暮らしぶりが感じられました。また、同じ真田地区では、地域の人々の声掛けによって、山家神社での御柱祭が新たに始まったことも紹介されました。これは、人と人とのつながりが生んだ好例と言えます。

つながりづくりは、しがらみになると敬遠されがちですが、楽しみを分かちあい共有しあうことで新たなつながりが生まれます。

チームの話し合いの最後に、「次世代に残したい、又はつなげたいものは何ですか？」という設問がありました。家族の中で、ご近所うちで、そして地域で考えてみてはいかがでしょう。

わくわくステージ（浦野宿勇太鼓）

連だこ（たまり家）

ふれあい広場（ストラックアウト）

くじ引き（つなぐ家）

11月2日（日）おさんぽギャラリー秋＆えがおマルシェ

えがお縁日では食べ物や射的の屋台、手工芸品のお店、キッチンカーなどが並び、大勢の人でにぎわいました。子どもたちは子ども銀行で換金したソロン通貨を使ってお買い物や遊びを楽しんでいました。

えがお縁日（屋台）

手工芸品（バングラディシュ支援）

えがお縁日（射的）

えがお縁日（キッチンカー）

わくわくステージ（抽選会）

えがお縁日（一休み）

飛龍太鼓

靴飛ばし

バルーンアート

ティラノサウルスレース

11月3日（月・祝）上田市誕生20周年記念 武石地域交流秋まつり

ふれあい動物園や消防ふれあい広場では、子どもたちが動物の餌やりや消防はしご車に乗るなど、普段あまりない体験を楽しんでいました。あした天気にな～れ！も同時開催され、靴飛ばし大会の他にティラノサウルスレースがおこなわれ、会場が盛り上がりました。

ひつじ（手触り）

ティラノサウルスレース表彰式

ポニー（餌やり）

はしご車体験

消火器体験

武石銀座通り

第34回 たけし歴史さんぽ道

名勝「飛魚」のこと Ⅰ

郷土史家 児玉卓文

武石の名勝「飛魚」の景観が変わり、武石村時代の案内板の説明文と合わなくなりました。もともと、説明文には歴史的事実として疑念がありました。

その説明文の原典は『武石村誌　現代』410ページで、次のように書かれています。

> 明治39年5月大屋の千曲川で簗漁に興じた伊東祐亨・東郷平八郎・上村彦之丞の三将軍が、日露戦争の犠牲者の多かった依田窪地区を訪れ戦病者の霊を弔い、傷病者を見舞った際飛魚に立ち寄り、松苗三本を植樹しましたが、今も二本が残っています。

海軍の伊東元帥・東郷大将・上村中将が上田に来たのは、上田町の飯島七郎兵衛の招きによるものです。

10日17時に上田駅に着いた三将軍は、日露戦争勝利の立役者であり、その翌年ですから人力車で横町の飯島邸へむかう途中、沿道を埋めた町民に熱狂的な歓迎を受けました。

11日は、国分寺にて記念の松を植樹し（現存します）、大屋の依田川と千曲川の合流点でハヤの簗漁を楽しみ（東郷橋の言われで、使用の船は大屋神社に保存されています）、上田城内の招魂社に玉串を捧げ、松を植樹して記念撮影し（『武石村誌』の写真はこの時のもの）、上田尋常小学校で講話、町民歓迎会があり、上田女子尋常高等小学校楼上では夜会が催されました。

12日は、小県蚕業学校（現上田東高校）・上田中学校（現上田高校）・上田高等女学校（現上田染谷高校）で訓示や揮毫をした後上田橋で簗漁を観覧し、午餐の後上田駅に向かい、坂城駅・屋代駅で熱烈歓迎を受けながら篠ノ井駅に下車しました。

三将軍の日程に武石はありません。日露戦争で、武石村出身の方が10名亡くなっていますが、全て陸軍で、特に多いわけでもありません。

大正２年８月15日、軽井沢に避暑中の土方久元・伊東祐亨・樺山資紀の伯爵三人が飛魚に訪れ景勝を楽しみました。武石・丸子の里人はここに東屋を建て、橋を渡して三伯爵を迎えました。土方伯は武石の東屋に「呈奇」の扁額を下さり、以後この東屋は「呈奇亭」と呼ばれます。そして三人は、呈奇亭の南の崖下に松を三本植えました。

三将軍の来遊は、これと混交して伝えられたようです。『村誌』は大正期の来遊者二名も間違えています。

昭和初期の飛魚と「呈奇亭」

「史蹟名勝天然記念物調査報告」第拾四輯より

さて、伊東・東郷・上村の三氏は10日の飯島邸の晩餐会の折、たまたま赤松小三郎のことに話がおよびました。赤松は上田藩の洋式兵学者で、幕末期に議会政治を提唱したことで知られています。明治39年5月号の『上田郷友会月報』は、その夜の様子を次のように伝えています。

> 上村中将はふと何か思い浮かべた様子で、にわかに様子を改めて、維新前に洋式の兵学家で赤松小三郎と言う人がいた。京都に学塾を開き、幕府および薩摩その他各藩の武士を訓練養成し、東郷君も私もともにその教えを受けた。赤松氏は信州の武士だが、暗殺された。信州のどこの人か、今その信州に来ているので、どうにかその跡を訪れたい。すると居合わせた一人が、その人は上田の藩士ですと答えた。

赤松は、慶応３年９月３日午後４時頃、京都東洞院通り五条下ル和泉町で、薩摩藩士中村半次郎（人切り半次郎）らにより暗殺されました。倒幕に決した薩摩藩が、赤松が出入りする会津藩を通して幕府に情報が漏れることを恐れたのです。また赤松が佐幕派の上田藩士であることも疑惑を招きました。

11日の夜、東郷と上村将軍は夜会から帰ると飯島氏を呼び、赤松の弔意として金八千匹（約４～500万円）を遺族に送りたいと言ったので、すぐに遺族の芦田氏を呼んでこれを伝達したそうです。しかし、二人は月窓寺の赤松の墓には詣でませんでした。

武石で働く事業所の紹介

武石の企業訪問

株式会社 ウイルダイフレックス
代表取締役　木内 勝也さん

武石鳥屋の見晴台団地入口から坂を約200メートル程上った所に、株式会社ウイルダイフレックスがあります。1998年(平成10)、(株)ダイフレックス(上田市古安曾)の武石工場として稼働、マイクロフォンや電気スタンドなどを生産しました。

2000年(平成12)に独立して新会社を設立、社名を(株)ウイルダイフレックスに変更しました。

従業員数は18名(営業1名、開発･技術2名、製造･検査12名、事務３名)で、鳥屋の工場以外に約20名程の内職さんを雇っているそうです。

事業内容は売上比率で、照明機器が60%、通信機・電子機器が20%、機械部品の組立・その他が20%となっています。主力製品は表示灯とLED 照明機器で、表示灯(写真)は約250種類、年間約50万個を生産、主にエレベータの行先表示や制御盤の動作表示などに使われています。また、LED照明機器では、スポットライトや照明用ライトなどの他に、製品検査用の無影灯や平面発光装置、など多様な製品を生産しています。

通信機・電子機器では、パソコンを使った検査装置や作業者管理システムなどの開発、製造を行っています。

主力製品の表示灯

電子部品の自動実装設備

「“アイデアを形に”を企業理念に、これまで500以上の製品開発に携わり、お客さんの要望に応えてきました。開発設計から製造・出荷まで自社の一貫体制で対応できるのが会社の魅力であり、強みです」と木内社長は話していました。

現在、新事業として力を入れているのが“光医療”の分野です。太陽の光を浴びると人は健康になるということは経験的に知っていましたが、詳しい理由はわかりませんでした。しかし、近年は細胞レベルで光が及ぼす作用の解明が進み、光の作用によって人の様々な症状(痛みやコリ、ストレス、神経痛、不眠症、など)の緩和・解消に効果が認められていて、どんな光が良いのか研究テーマとなっています。

国や県は、先端技術や成長分野での創業を支援する事業を行っており、この支援事業の認定を受けて、現在５種類の光医療機器を開発中です。既に特許や商標登録の取得も進んでいます。

開発中の光医療機器
「アマリュージュ」

また、光医療機器の販売方法にもアイデアがあり、“ラスト・ファイブ・ミニッツ”(最後の５分間という意味)という新しいブランド作って、健康機器として販売をしたいとしています。

ある営業の会社では、「帰る5分前にみんなで笑って帰りましょう」という試みを行ったところ、社員が生き生きと働くようになり、会社の業績もアップしたという事例があるそうです。

その日の働きで生まれた疲れや痛み、ストレスなどから体を解放させるために、光医療機器やその他の健康機器を会社が購入して使ってもらい、「最後の5分間に体をケアしてリセットして家に帰りましょう」と言えば、働く人の満足度や会社との信頼感が増し、会社の魅力アップにもなります。これは、木内社長がモットーとしている「人を大切にする」ことにつながります。「こうした取組みは、労働環境の整備や向上の新しい考え方であり、人手不足や高齢化といった社会の変化にも合っているのではないでしょうか」と木内社長は新事業に向けて展望を話していました。

株式会社 ウイルダイフレックス
住所：上田市武石鳥屋73－41
電話：0268(85)0877
ホームページ：https://www.willdaiflex.com